

## 近歩五連隊と私の戦前戦後

山梨県 田中 要

私は大正十一（一九二二）年三月十三日、山梨県南巨摩郡増穂村宇小林で父隆之助、母安次の長男として出生、私を入れて男三人、女三人の家族でした。

昭和三（一九二八）年四月、増穂尋常高等小学校に入学致しました。当時は不況続きで失業者も多く、とくに小資本の田舎銀行は倒産するもの多く、世界的不況、東北では生活に窮し、年ごろの娘を身売りする、また輸出品の大宗たる生糸は繭が一貫一円に暴落し自棄になって川に捨てたとか、発券銀行である台湾銀行が潰れたとか騒然たる世の中でした。やがて勃発した満州事変は支那事変へと拡大し、緊張の数年となり、毎日のラジオニュースに聞き入る状態でした。

私は昭和九年四月、甲府市立甲府商業学校に入

学し、増穂より甲府までの四十キロを山梨交通、当時は峡西電鉄、通称「ボロ電」で五年間通学しました。年間電車、バス代は四十九円九十二銭で、学校授業料が月額四円五十銭の時代でした。

そして昭和十四年三月に甲府商業を卒業し、昭和十七年末まで家業の呉服商の営業を行い、両親や従業員と共に甲州商人として、また「労働は祈祷なり」の商人魂で不況を克服して参りました。

### 連隊の創立

昭和十年代の初期、支那事変も長期化の気配、中国や東南アジア等でも事件続発、時に昭和十四年十月二十五日に天皇陛下より我が連隊（旧麻布三連隊）に軍旗が親授され、御勅語を賜り、ここに近衛歩兵第五連隊が誕生発足しました。初代連隊長として永沢三郎大佐が就任し、三個大隊十二個中隊の編成でした。後で出ますが、第二連隊長は岩時豪雄大佐、第三代が沢村駿甫大佐でした。

大東亜戦開戦は昭和十六年十二月八日、畏くも陛下より米英に対し宣戦の御詔勅を拝し、一億一

心、以て困難に当る決意を新たにした次第です。

帝国海軍は真珠湾を奇襲攻撃して米太平洋艦隊に壊滅的損害を与えました。その戦果は、はなはだ大で、戦後六十二年を経て、当時の大本営の戦果の報道やラジオ放送に歓喜した人々は減少していくばかりです。私はこの貴い日本の歴史のペー  
ージを後世に伝えたい気持ちです。

#### 私の軍隊生活

一 徴兵検査 昭和十七年四月二十日

二 入 営 昭和十八年四月十日 東京都麻

布近衛歩兵第五連隊（東部第三

八〇四部隊）

三 外地出征 昭和十八年十月十日大阪港出港、

四 同年同月末スマトラ島ベラワン港上陸、ス

マトラ島の首都メダンに駐留、乙種幹部候

補生合格

五 昭和二十一年十二月八日広島県大竹港に帰

還

#### 近歩五連隊史概記

軍旗親授は先に記した昭和十四年十月二十五日でした。宮城、赤坂離宮官邸の守衛任務に当りました。昭和十六年一月、南支広東に上陸し、同地の警備に当たり、同年七月、南部仏印に進駐しました。大東亜戦争では陸路タイ国を通過してマレー半島の追撃戦、シンガポール攻略戦に参加し勇名をはせました。昭和十七年三月、スマトラ平定作戦に参加した後、マレー及びジャワ島の警備に当たった。

昭和十八年六月、従来の近衛師団が近衛第二師団と改称され、近歩三連隊と近歩四連隊と共に同師団に編成されました。

昭和十九年一月、編成改正があり、砲兵、工兵、海上輸送部隊を含む大部隊となり、後にメダン付近にあって海上機動訓練を実施し、敵の上陸作戦に備えたと書かれています。

私は昭和十八年四月十日、現役兵として近歩第五連隊に入営、初年兵教育を受け、間もなく同年

十月十日大阪港を出港、スマトラ島ベラワン港に上陸、首都メダンに至り、第三大隊第八中隊の重機関銃小隊に編入となりました。

大隊長は竹内少佐、中隊長は太田中尉でした。のちに早乙女中尉が中隊長となりました。今にして思えば大場、石川、平間、高林などの中隊幹部の日夜のご苦労が心に浮び、感慨ひとしおです。

また多数の先輩各位が他界され残念でたまりません。六十数年の年月の経過は各人の人生に相当の紆余曲折があり、十人十色、万人万色、同じ人生を送る人は一人も存しないことは間違いないことです。当時、このスマトラ島には、いまだにオランダ軍の残兵が残留し、そのため治安、掃討の毎日でした。

一方、原住民のインドネシア人は、同じ東洋人である日本軍に対して、熱烈たる親密さで歓迎し、愛情を以て協力し、我々を迎えてくれました。オランダ軍はインドネシア人を見下し、文化的にも優越感を持ち、植民地的支配を行い、搾取してき

たから、インドネシア人の生活は貧しく、困苦欠乏に耐えざるを得ない状態にありました。

インドネシア人はこの度の日本軍の進駐、駐留を心から歓迎し、以後日本軍の要請に応じて使役として役務に従事し、いろいろの雑務に服し、日本軍の警備駐留に役立ちました。それから、昭和十九年、二十年と時は移り、我々の近歩第五連隊は、この大東亜解放戦にいつ大勝して、米、英、蘭を降服せしめるか、希望をもったメダンでの軍隊生活でした。

その当時、連隊幹部将校として陸軍中尉賀陽宮邦寿殿下を第十中隊付としてお迎えし、一層の名誉と誇りを胸中に、日夜軍務に精励した次第です。

一方、現地の地方病であるマラリアに対する安全管理対策と毎日一回くるスコールという大豪雨の対応もまた欠かせないものです。軍務については部隊の命令による勤番訓練作業はもちろん、友愛の精神で原住民と交流し、安全でしかも楽しく有意義な毎日を過ごすよう、常に頭から離れない

生活態度でした。我々は特にメダンを中心に進駐し、駐屯していましたが、常にテビチンギとカバンバヤは第三大隊に匹敵するぐらいの苦楽の戦場でした。とくに大隊長武内大尉の下での軍務はもちろん、私的交流はいまだに私の心に深く刻まれています。また第三大隊には荒井、本多、大村、早乙女、大場、菅原、太田、妹尾、上村、西谷などとは、近衛精神で意気投合し、軍隊ならではの楽しい交流を重ね、和気に満ちたスマトラの生活でした。

平穩の日時も過ぎ昭和二十年八月十五日、終戦の報が大本営から発令されましたが、我がメダンの近歩五には二日遅れの八月十七日に正式連絡があり、驚きの極みでした。メダンをはじめスマトラ全島において、我が軍は大勝利して本日に及んでいたのです、我々は終戦しかも敗戦の報に驚き、心身共に残念、無念の心で夜も眠れない状態でした。

思えば昭和十八年十月、スマトラ島ベラワン港

上陸以来満一年十カ月、首都メダンに駐屯し、現地人の歓迎を受け、協力を得て軍務を遂行しました。

それに引き換えビルマ、比島、ガ島、サイパン、硫黄島、沖縄などの死闘、飢餓戦線を思う時、感慨ひとしおでした。

同じ軍務に服しながら勤務地の相異で環境著しく違い、一方は飢餓、激戦、死闘と数えきれない悪条件の軍務に比べ、同じ南方軍でありながらスマトラは平穩で敵機の来襲はなく、現地の治安も安定し、戦地にいるとの感も乏しく、運次第とはいえ、余りの隔絶は何と申すべきや答えを知りません。因果と言うべきか、神の配剤と言うに余りにも不公平でしたと思います。

#### 終戦後の私

終戦の報を聞いた後、当分の間は敗戦の言葉や文字さえも我々の心から捨てたい心境が続ききました。残務整理が発令され、世の中が一変した感がありました。島では現地人が我々を慕い、終戦

前と変わるかとなく協力してくれて治安維持が行われました。昭和二十年後半でしたが、各隊、各班の帰還が近付き、悲しみの増した当時でした。

とくに私は大隊本部付となり、帰還業務を命ぜられ、その仕事や軍用資材、武器処理に忙しい毎日でした。また将校所持の軍刀は連隊本部に一括収集し、刀剣を鑑定して上中下の三段階に分類して倉庫に保管しましたが、連隊長の命により日本刀一振でも日本に待ち帰ることは不可能でした。

残務整理の進むなか、昭和二十一年夏ごろに十班ほどに分けて帰国の途につきました。途中、命令によりシンガポールに寄港、ジョホール州のバトババに上陸し、米英軍の指示の下に作業隊が編成され、着の身着のままに使役され、衣食住は不充分的な連続の捕虜生活でしたとのことでした。

しかし私は終戦処理のためメダンに残留し、沢村連隊長の下で昭和二十一年十一月を最後にメダンを後にして、ペラワン港より帰国の途に就きました。この事については後記しますが、今思えば

昭和二十一年陣中で病死された寺内元帥の墓を、英軍の許可を得て我が近歩五の戦病死者の墓と同じくシンガポールに鎮座、造営することが出来ました。この尊い仕事を担当したのが私の先輩である山梨の上村芳文大尉でした。上村様も平成十年にご他界され、心からなる哀悼の意を表します。

私は昭和二十一年十一月、メダンを後に内地に復員しました。幸い帰還船はどこにも寄港せず、一路瀬戸内海の広島の大竹港に着岸しました。時に昭和二十一年十二月八日で日米開戦の記念日に当り感慨ひとしおでした。五年前の開戦の日、真珠湾爆撃の情景を思い起し、近歩五連隊はマレーへの作戦中だったと当時を思い出した次第です。解散式は沢村連隊長のお話し、スマトラにおける労苦に対するねぎらいの言葉、戦没者に対する哀悼の言葉、日本国再建復興に粉骨碎身するよう諭され、日本国の万歳を三唱して終了しました。命を共にし、生き残った戦友と涙の別れをして広島駅に着くと、原爆で一面の焼野原で無残なる状

態は想像を絶するものでした。東海道線で静岡県富士駅を経由して身延線に乗り換えて甲府に向いましたが、電車故障で南部駅近くの橋上で急停車、後続電車に乗り夜中に甲府駅に着きました。甲府も空襲で焼野原、米軍の非情を知ったのですが、ようやく生れた家に帰ってきました。

父母兄弟全員は無事健在で私の帰りを喜び涙したものです。家業の呉服屋は衣料が統制品で切符がないと売買が出来なかったが商売は結構忙しかったとか、こうして私は第二の人生を迎えることとなりました。

最後の人生の出発点としての強い意志は、近歩五精神を常に持ち続けることでした。また日本刀の教えるところの人生訓の言葉の通り「折れず曲らずよく斬れる」の精神を胸中に保有して社会に貢献することでした。

今次大戦による日本の被害については、広島、長崎に対する原爆投下により無辜の民の死者二十数万の多きに達し、被爆し病傷害を受けたる者五

十万を超え、家財の焼失は多大なるものがありました。私が大竹港から広島駅に至る道すがらにも樹木一本なく、焼失を免れたる家屋一軒だになく荒廃その極みでした。

それ以外のことは考えずに、ただひたすら家に帰りたいの一念で、汽車は順調に走る中、そんなことばかり考えました。東京をはじめ各都市が恐ろしい大空襲を受け、我が山梨の県都甲府市も焼野原の悲惨なる姿に変わっていました。これが敗戦、終戦の日本の姿でした。

そこで国民の一人一人が困苦欠乏に耐え、また樺太、国後、択捉島、積丹、歯舞、朝鮮、台湾、南洋委任統治領は我が国土より消され、建国以来の大八洲になって仕舞いました。このような環境下でありながら日本国民の強い精神力と日本再建、復興の並々ならぬ努力の毎日でした。

当時はもちろんテレビ放送はなく、ラジオ放送のみでした。昭和二十三年十二月、私は生れ故郷の春米の旧家から父・神田貞造氏、母貞子様の長

女、愛子と結婚し、男一人、女二人の子供の父となりました。当時は衣食住共に大変りの時代でしたが、諸事順調に進み、昭和二十九年までに子供の生誕を終わり、文字どおり月、月、火、水、木、金、金の休みなしの活躍により目的の達成に努力しました。

幸にも私をはじめ家族全員が健康に恵まれ、商売も成功裡に推移致してきました。いつの間にか私が八十五歳、妻七十八歳となりました。思うに食生活や後記するスポーツによる健康づくりの効果であろうと信じ感謝しております。

また家業の田中屋呉服店は田中屋衣装店と名を改め、呉服小売販売と冠婚葬祭、文化活動用の貸衣装業の県内初のリース業を営み、今日まで五十五年継続して参りました。そして県内、長野、東京、静岡及び名古屋などの御客様を多数いただきました。また長年、社会活動奉仕にも尽してまいりました。

#### 近歩五会（戦友会）

戦後六十二年を迎える現在、我が近歩五会は新井（旧姓、柳沢）会長などのご努力により『近歩五たよ里』を毎年発刊され、戦死、戦没者と戦後病死者の名簿を掲載し、心からご冥福を祈っております。また連隊の歴史と近歩会の記録を記した本は第四十五号までで一応終刊となり、時代の推移と会員の高齢化により平成十七年に解散いたしました。また我が中隊は年一回、新潟県寺泊の聖徳寺において戦没者の慰霊碑に参拝を続けております。

一方山梨の戦友会として、我が八中隊が全国に呼び掛けて、近歩五に在籍した生存者を「近歩五〇B会」と名付けて発足いたしました。この時が平成十六年十月でした。会長に中村良太郎氏をお願いし、会合は現在も継続しております。

近歩五の大隊副官であった本多栄二氏は現在、正栄食品㈱の会長で毎年「近歩五便り」を自費出版されて生存者約五百人に贈られております。

近衛歩兵第五連隊歌

一、東亜の空に風荒れて 征旅は進む三千里

護国の使命身に負いて

義士ヶ丘に生れたる 我等の近衛五連隊

二、十月菊咲く二十五日 親しく天皇賜わたる

軍旗翻る下に生き

向こう荒野に死を誓う 我等近衛の第五連隊

三、大内山の松陰に 果たす守衛の任重く

君万歳を祈りつつ 我等近衛の第五連隊

四、勲功は高し桜花 聖諭は堅く肝にあり

三ヶ年の皇国を 守護りて永久の名に生きん

我等近衛の第五連隊

復員時の私の階級は陸軍曹長でした。

マーシャル諸島ミレー島の死闘

滋賀県 佐藤 保

ひもじかと 問うも愚かぞ 此の頃は

死にたる戦友を 幸に思ほゆ

何故に吾を 生みたりと 父母迄も

恨む程心 荒べり

爆撃機 遠く去りたり ものいはぬ

体いくつぞ 硝煙の切間に

南海の 小島の砂を 紅に

染め散りゆく 姿如何につたへむ

この短歌は、マーシャル諸島ミレー島で将兵の詠まれた歌の一部である。

私は昭和十六（一九四一）年十二月末日、海軍

志願兵募集に応募し、昭和十七年初め検査合格、

横須賀海兵団へ入団、新兵教育を受けた後、館山

海軍砲術学校に入校し特別陸戦隊教育を終了した。